

クレティアン・ド・トロワ作（オウイディウスの原作による）

『フィロメーナ』 I

天沢 退二郎訳

目次

《解題》

物語本文（1～737行）

《訳注》

次号 II 目次

物語本文（738～1468行）

《訳注 つづき》

《解説》

《解題》

これからお読みいただくテキストは、クレティアン・ド・トロワ *Chretien de Troyes* の初期作品『フィロメーナ *Philomena*』（八音綴による韻文全一四六八行）の、中世仏語原典からの邦訳である。

この仏語原典は、紀元一世紀にオウイディウスによってラテン語で書かれた長篇『変身物語』全一二九九五行中の一挿話（二四八行）を原作として、一七〇年代初め頃、およそ六倍の長さの韻文自由訳されたものである。

ここに拙訳を本誌本号の特集に載せていただく理由を混えて、以下本篇の解題にかえて略述しておく。

作者クレティアンは、十二世紀後半に活躍したフランス語韻

文物語作者として、質量ともにこの時代を代表した作家であり、中でもその本領は、『エレックとエニード』をはじめとし、『クリジェス』『イヴァンまたは獅子の騎士』『ランスロまたは荷車の騎士』そして『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』まで、全五篇合計約三万六千行に及ぶ長篇アーサー王物語群である。

およそ十二世紀は、一種の文芸復興期にあたり、とくにフランス語韻文物語文学は、この世紀の前半に、古典古代に取材したローマの作家によるラテン語作品を、俗語であったフランス語に翻訳ないし翻案するいわば植民地文学として出発し、後半にいたって、ついに自前の題材「ブルターニュの題材」による本格的物語文学へと展開する。その主導的役割を果たしたのがクレティアンである。

さてそのクレティアンの、アーサー文学第二作『クリジェス』（二一七六年頃）の有名な冒頭部は

かつて『エレックとエニード』を書き、
オウイディウスの『戒律』

および『愛の技術』をロマン語に移し、

『肩の傷』を書き

また『マルク王と金髪のイズー』

そして『ヤツガシラとツバメと

サヨナキドリの変身』を物語化してきた者が、

いよいよここに新しい物語を始めるところだ〔以下略〕

という、それまでの自作目録による自己紹介ではじまっている。ここで『肩の傷』『ヤツガシラとツバメとサヨナキドリの変身』が、オウイディウスの『変身物語』メタモルヨシス巻六に収められた二篇を先行テキストとしていることは明らかであり、それに先立つ『戒律』『愛の技術』と併せて、クレティアンの初期の文学活動がラテン文学の巨匠オウイディウス作品の、フランス語への翻訳・翻案ではじまったことを（かつまた、すでにトリスタン・イズー伝承に手をそめて、ブルターニュの題材の物語化にも参入していたことをも）クレティアン自身が証言しているのである。

してみれば、十二世紀前半から後半への、ラテン語テキスト受容からロマンズ語による創作へという一大転換を、時代的にも、実作上も、クレティアンは自ら体现することによって、作家としてのアイデンティティーを確立したことがわかる。

ただ、残念なことに、クレティアンによる『戒律』『愛の技術』『肩の傷』の中世仏語テキストは伝存していない。ところが、『ヤツガシラとツバメとサヨナキドリの変身』は、どうやらそれと覚しいテキストが、編者不詳の『オウイディウス教訓本（あるいは「教訓付きオウイディウス」とも）*Ordo monachi*』の十四世紀写本の中に、十九世紀末、ガストン・パリスによって発見された。それが『フィロメーナ』である。作中に、作者名主格形《クレティアン・リ・ゴワ（あるいはグエ）*Crestiens li Goua*》と記されていて、一九〇九年にC・D・プールによる校

訂本がパリで刊行され、さらに一九二〇年にアムステルダムで出た『オウイデウス教訓本』第二巻に収められた。本訳稿は基本的に、一九〇九年のド・ブル本に拠っている。

この『フィロメーナ』が、クレティアンの真作であるか、また、クレティアン・リ・ゴワとクレティアン・ド・トロワが全く同一人であるかについては、その後の研究によつて完全に究明されているわけではないが、一応、『クリジエス』冒頭の記述および、『フィロメーナ』テキストとオウイデウス作品の、長さこそちがえ、エピソードの内容・順番の一致からみて、これをクレティアン作品と見なすことに障害はないとされている。

長さこそちがえ——と書いたが、そのちがいは、多くの興味深い問題がひそんでいる。

あらずじは——ギリシヤ、アテネの王に二人の王女があった。そのうち、姉の嫁よめいだ夫が、妹を凌辱し、事を隠して帰る。真相を知った姉は妹を救出し、夫との間に生れていた男児を殺して、二人で調理して夫に食べさせる。怒り狂つて二人に迫る夫——この三人が、次々に鳥に変身して話は終る。

この話はギリシヤ神話の中で昔から知られている——のだが、その今日まで伝わっているテキストの分量を、便宜上、現行の日本語訳文庫本で見ると、

- A アポロドーロス『ギリシヤ神話』（岩波文庫）
- B ヒュギーヌス『ギリシヤ神話集』（講談社学芸文庫）

- C ホメロス『オデュッセイア』（岩波文庫）
 - D オウイデウス『変身物語』（岩波文庫）
- の四種の、各本文では、

- A 12行
- B 16行

- C 三カ所に言及あるも2、3行ずつ

- D 約4頁、計58行

となつていて、オウイデウスのが段違いに詳しく、長いといつても、前述のように、原典韻文は二四八行にすぎず、これに対してクレティアンの韻文は、その六倍の一四六八行である。この長さは、エピソード数は殆ど同じなのに、どうやつてもたらされたか？

クレティアンは、オウイデウスの物語の筋書きを、ほぼその通りにたどりながら、

- 一、原作にない直接話法により会話を多用、
- 二、人物たちの行動を詳しく描出、
- 三、その行為に際しての人物たちの心理を詳しく描写
- 四、語り手による恋愛論等を挿入展開
- 五、中心人物のポートレート（プロフィール）を詳細に加筆増量

といった手段を存分に利用している。それも量的に、長く詳しくするだけでなく、質的にも、物語のリアリティを強め、十二世紀の俗語文学受容者を十二分に堪能させる配慮を示してい

る(その結果が、クレティアン作品に充実感をもたらしたのみならず、古典古代文学から中世文学への影響のさまざまな問題を提起している点については、拙訳全体をお読みいただいた後、『解説』において、私の考えをまとめる予定である)。

知られているように、クレティアンの『フィロメーナ』は、『オウィディウス教訓本』以外にこれを収めた写本はない。この *Ovide moralisé* の写本は、十九種伝存している。C・ド・ブルーはこれらを検討してステマも作成し、そのうち最も古くかつ充実したA、すなわちルーアン写本(市立図書館1044(04))を底本として校訂本を作成刊行した、その復刻本が一九七四年にストラトキンから刊行されている。

他に、その後刊行されたテキストとして次の三つがある(いずれも現代仏語訳との対訳形式)

- 1° Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*, Gallimard, 1994
« Bibliothèque de la Pléiade », p.1391 sq. *Philomena* ed. et notes par Anne Berthelot.
- 2° Chrétien de Troyes, *Romans*, Librairie Générale Française, 1994. « La Pochothèque », p.1225 sq. *Philomena* ed. de C. de Boer ; trad. d'Olivier Collet.
- 3° Pyrame et Tisbé, Narcisse, *Philomena*. Edition bilingue d'Emmanuèle Baumgartner, Gallimard 2000. « folio classique », p.155 sq. *Philomena*.

右のうち、1°および3°はいずれもルーアン写本1044を底本としているが、ド・ブルーによる重要な校訂の多くを採用(ただし細部に異同がある)。2°はド・ブルー本を底本としている。

なお、本訳注は、主としてオウィディウスとの顕著な異同を指摘した他、1°および3°の注その他を参照しつつ作成した。

なお、クレティアン・ド・トロワ作品の邦訳書として、現在まで、次の三つが刊行されている。

- 神沢栄三訳『ランスロまたは荷車の騎士』白水社版『フランス中世文学集 2』(一九九二)所収
菊池淑子訳『獅子の騎士』平凡社、一九九四
天沢退二郎訳『ベルスヴァルまたは聖杯の物語』白水社版『フランス中世文学集 2』(一九九二)所収

その他、主要参考文献は、本訳Ⅱ(『言語文化』次号)の末尾に示す予定。

クレティアン・ド・トロワ作（オウイデイウスの原作による）

フィロメーナ

天沢退二郎訳

〔注意〕
原則として五行毎に下方に記された数字は、原典の行ノンブルと厳密には対応せず、大さっぱな目安である。

……

……

……

パンデイオンはアテネの王だった。

力あり気前がよく、礼節を心得ていた。

二人の姫あり、鐘愛^{（1）}の的であった。

一人は名をフィロメーナ^{（1）}。

もう一人はプログネ、これが姉。

この姉は嫁^かしていた。

トラキアの王に所望されたのだ

パンデイオンは大いに喜んでいて。

喜んで居った？ まことに。何故？

娘を王に与ええたからだ。

1

5

10

王に？ しかしこいつが卑劣な暴君
この暴君、名はテレウス

こいつにパンデイオンは、易々諾々、
愛する姫プログネを与えたのだ。

テレウスはよからぬ婚^{（2）}礼をした。

ヒメネウスがいなかったからだ。

この神が婚^{（2）}礼に招かれるべきだった。

だから式では学僧も僧侶も歌わず、

飲^{（3）}びのしるしは何もなく、

夜通し、しわがれ声で、

初夜の闇^{（3）}の上でワシミミヅクと、

モリフクロウ、カッコウが鳴いた

それにメンフクロウと、カラスもだ。

これはまったく不吉なしるし。

すなわち悲しみと苦しみを

意味していた

これらの集^{（2）}いは最悪だった。

寝室を、居間を、

夜もすがら飛びめぐつたのだ、

アトロポスにテジフォース^{（4）}、

そしてあらゆる悪運が。

婚^{（2）}礼が終ると

テレウスは妻を伴って

25

20

15

30

トラキアへ帰った——高貴なる妃として。

やがて二人の間に男子が生れた。

これが実に不幸なことになるのだが。

王子が誕生した日、

国中が祝福し、

そして毎年この日を祝った。

テルヴァガン(5)のと同じように。

これはテレウスの命による。

子どもは成長し、立派に育った。

五歳ですてきな美少年になった。

名をイテイスという。じつに悲しいことに

それ以上永くは生きなかつた。

どうしてそんな最期をとげたのか、

事の次第をゆつくりお話ししよう。

しかしその前にお話しすることがある

五年以上の歳月を

プログネは夫と

一緒に暮したらしく思われる。

そこで、妹のフィロメーナに

逢いに行きたい気持がつのつた

ただ、夫の機嫌をそねたくはないのだ

ある日、夫にこの希望を打明けた
誓って、約束します、

35

もし海の向こうの妹に

逢いに行かせて下さるなら

できるだけはやく戻ってきます

長居するようなことは致しませぬと。

ところが夫は妻の旅を許さず

妻は妹に会うことが叶わない

そこで妻は夫に、貴方が迎えにいらして

ここへ連れてきて下さいと懇願した

夫は、よし、そなたはここにとどまっておれ、

不平を言わずに待つがよい

私が、嵐になろうが風が吹こうが、行って

そなたの妹をトラキアへ連れ帰ろうぞ。

テレウスはただちに船団に指示して

食糧を積み込ませ、

帆柱マストや、帆、帆桁マストを準備させる。

すべてが整うと、いよいよ乗り込んだ、

大勢、家中の者を伴って。

出発に際して、プログネが懇願するには、

あなた、早く妹を連れてきて頂戴ね、

ここでいよいよ一行は海へ乗り出した、

帆綱をしつかりと張り、

星の運行を目じるしに船を進めて、
昼も、夜も、航海を続ける。

45

50

55

75

70

65

60

ところが実に困ったことに、

この旅はまったく順調に進み

海はあまりにも平穏無事で、

このためにじつに最悪の事が起こるのだ――⁽⁶⁾

王の暴虐に歯止めがかからなくなるといふ――

さもなければ不幸は避けられた筈なのに。

パンディオンの耳に、王の船団が

到着したという知らせが入った。

それによると、^皇殿が、

会いに来てくれたのだという

早速、迎えに出なければ。

すぐにパンディオンは出かけて行く。

港の入口でテレウスに出会い、

挨拶をして、接吻を交わす、

唇に、眼に、そして顔に。

こうしてじつに大いなる歓迎ぶりをしたので

ほとんど、わずらわしさを呼んでしまう。

王に随行してきた臣たち全員に

挨拶して、城内へ案内し、

熱心に、本当のことを教えて下され、

わが娘、わが孫が

大いに楽しく、健やかに、暮して居るでしょうね、と。
テレウスも答えて、

80

みな楽しく健やかにして居て
父上によろしくと言うて居ります。

それから、それ以上隠し立てせず、

今度の旅の目的を語り出す――

《^義父上、実は私が参りましたわけは、

娘御プログネが、妹フィロメーナに

大変に会いたがつておりまして、

そこでこの私を使い、寄越した次第でして、

私自身も、たつてお願い申し上げます、

どうか娘御を彼地へ行かせて頂きたい、

娘御の留守は父上もさぞ御心配であらう、

たとえ僅か一日、一時間、お傍にいらなくても

早く帰つて来ぬか、遅い、遅いと、

耐えがたくお思いになるであらう。

されば、誓つてお約束しよう、

帰途のため穏やかな順風と

思われればただちに、

妹御をそれ以上お引き止めなどせず、

ただちにお帰り申し上げる、と。

ただし、はつきり申して、

妹御がここへ顔をお見せにならぬのが残念です。》
まさにこのとき、隣室から

髪の乱れたまま、フィロメーナが⁽⁷⁾出てきた。

100

95

90

85

125

120

115

110

105

被衣びいをまとった尼僧とは似もつかぬ——
そのすばらしさをどう言い表そうか！

美しい身体、輝く容貌、
とにかく、私の考えでは、

彼女の大変な美しさのすべてを表現するには
プラトンの感覚と言葉でも

ホメロスやカトウの大きいなる知恵を以てしても
充分であったとは思われない。

とすれば右の三哲人に伍してこの私が
うまく表現できなくても恥ではあるまい、

私なりにできるだけだけやってみるとしよう、
いったん試みるとした上は思い直しはせぬ。

みなさんの思う以上のことをやってみせよう。
まず容貌、次に身体の順で行こう。

純金よりもっと輝くのが、
髪毛かみげぜんたいだ。

これこそ神のなし給うたみ業わざで、もし自然が
これ以上手を加えようとしたとしても

うまくいくはずはなかったであろう。
額は白くなめらかで、皺しわひとつなく

両ふたの眼は黄風ワウフウ信子石シンシよりも澄あんでいて、
目と目の間は広く、眉毛まゆげはすつきり

お白粉しろいも紅べにも全くつけていないのだ！

145

140

135

130

鼻はなすじはまっすぐで高くて、
まさに美しさが求めるとおりである。
顔色は活々として、

薔薇ばらや百合はくげの花のよう、

口は微笑を浮かべ、唇はふっくらとして
ほのかに赤味を帯びているのが、

絹織物よりもその色合い好もしく、
その息の香かぐわしいことといったら

アマトウガラシもバルサムも薫香かぐもかなわない。
歯は小さく、白くて、形よく並んでいる
顎あごと頸くびすじ、のどと胸は

どんな白貂びんぎの毛皮よりも白く
両ふたの可愛らしい乳は

二つの小さなリンゴのよう
手はほっそりとして、長くて白く

脇腹わきは細くくびれて、腰こしは下さがっている
その他、全体、みごとに身体からだつきは

他に見たこともない素晴らしさ
これは「自然」が、努力なつりと技わざの

すべてを注そそいで造つくりなしたからだ。
これほどの美しさに加えて

乙女おんなが心得こころえしておくべきこと全て知しっていて
その賢かしこさは決して美しさに劣おとらない

170

165

160

155

150

あえて真実を申すならば、

彼女が喜びや楽しみを知っていることは

アポロニウスにもトリスタンにも優っていた

それも何と十倍以上もだ——

西洋双六や、西洋将棋の名手であり、

古いゲーム、《はったり》や

《こけおどし》の手だつて使いこなし

そんな楽しみ上手の気性によって

高貴な騎士たちにも愛されていた。

ハイタカやチヨウゲンボウのことなら

貴種であれ雌であれ、よく心得ていて、

タカの毛を生え変らせることも知っていた

オオタカでも、ハヤブサでも

とにかく狩猟なら森で獵犬を使う狩も、

川で魚を獲る漁でも彼女にかなう者はなかった。

その上、すぐれた織姫でもあって、

高価な絹の布を用いて

花模様を織りなす腕前は、世界中で

誰にもまねがでなかつた。

たとえエルカンの軍勢の不吉な行列でも、

高価な布に織りこむことができただろう

名高い文豪や、文法にも通じていたし、

自ら巧みな詩文も草することができ、

175

気が向けば、その詩文に合わせて、

古代絃琴や豎琴を弾き、

——えも言われぬ巧みさで——

舞曲やロッタを演奏したのである。

世にある歌物語や楽曲やメロディで

彼女が絃で演奏できないものは一つもなく、

また実に蘊蓄を傾けて表現できたから、

その声、言葉だけで

優に一家を成すこともできたであろう。

さて、父の傍へ姿を現わした乙女は、

血色の良い、輝くばかりの貌をして、

絹織物をびっちりと身に付けていた。

テレウスは乙女を抱いて

挨拶のキスをした。

このとき、乙女の驚くべき美しさと

たおやかな身のこなしが心を奪った

その心をうずかしたものは、

邪悪な、正気ならぬ期待だ。

邪悪な恋心がテレウスをとらえた

邪恋?——まさにその通り、

それが彼の心をとりにして

自分の妻の妹へ、

欲望の穂尖を向けさせたのだ。

200

205

210

215

だからといって——相手が妻の實の妹でもそれは邪悪な愛ではなかった、なぜなら当時彼らの崇めていた神の

220

神聖な掟によれば、

彼らは自分の意のまま、欲望のまま

何をしてよいとされていた。

その聖なる書かみには書かれてあったのだ、

人はみな、好きなように何をして

罪に問われることはない——

これが、異教の民の守っていた教えであった。

だからテレウスは、もし誰かに非難されたとしても、

自己弁護の根拠はあったことになる。

やりたいことをやったやっただけで、

誰にも口出しされる筋合いはなかった。

しかし、かれらの掟のことは傍へ置いておこう。

誰が愛の神に逆さからえるだろう？

——たとえその御意向が何であろうとも。

つまりはテレウスがトラキアから出て

フィロメーナを迎えに来たのが不運だった、

それで、愛の神の挑戦を受けたのだ。

すっかり異に陥ち、窮地に立たされ、

たやすく着火する火と炎に

身も心も燃え上がる

240

235

230

225

乙女を両腕に抱き、

こう言った——『可愛いひとよ、⁽¹⁵⁾

そなたの姉が、切々と訴えて言うことに

どうか訪ねてきてともに喜びを

分か合いたい、と。そこで私からもお願いだ。

もし私からの願いが、助けになるならば。

もし神に祈るだけでこのことが叶うなら

もうずっと前に、トラキアに来てもらえたはずだよ、

なぜならプログネの願いはただ一つ、

そなたを傍に置きたいということばかり

もし妻がここへ来るのを私が許したら

ずっと前に、ここへ来ていただろうが、

私はそれを許さなかった、

わりやりに、妻の心に逆らつて。

そなたの姉の切なる望みは、

そなたが十五日間、滞在してくれること。

何とか私の苦心を無駄にしないで、

お父上にお願ひしてくれないか、

そなたを私と出立させて下さるように。

父上に困ることは何もないはずだ、

もしそなたを旅立たせて

姉上と楽しい思いをさせたとしても。

妻は私に何度もはつきり言ったものだ

260

255

250

245

——私がいよいよ出航する時に——
もし妹を連れてきてくれなかったら、
あなたを二度と、決して

あたしの夫とも恋人とも思いません、と。

そして私は、よぼよぼの白髪老人に

なる方ははるかにましだ、

妻の不興を買うくらいなら。

だから、可愛い義妹よ、

そなたの父上に、どうぞ、お願いしてくれ、

そなたを私と一緒に行かせて下さるように」

決して愚かではない乙女は、

答えて言う——《王様、わたくしの言葉など

あなたの方に比べれば、何の価値がございましょう？

もし本当にそうなさりたいのなら

まず、ご自身でお願いなさいませ。

フランス人の習慣では、

何かを手に入れたいと望む者は、

それだけの勇氣と知恵とがあるのなら

その目的のために苦勞し、努力するのです。

そしてもし、それに失敗して

自分ではやり遂げることができないとき、

はじめて他の人の手を藉かりるべきです」

《乙女よ、そなたの言う通りだ、

265

しかし、ほんの少し、その言い方は
改めてくれてもよかったな。

そなたは、まず最初に、私がすでに父上に

お願いをしなかったかどうか尋ねるべきだった」

《ほんとに！ そうすべきでした！

もしわたくしにそれだけの理性があつたら、

父にちゃんと訊いておくべきでした。

けれど、やはり、はつきり仰おつ言もつて——

王様は父に、この件について

何かお話しになったのですか？」

《もちろん。ただ、あまりしつこくはお願いしなかった。》

《父は何と？》《何も》

《それでは、これでお話はおしまいです。

父が王様に何も御返事しなかった以上、

姉は、わたくしに逢うのを待てばいいのです、

せいぜい、何ヶ月かのことですね。

わが父なる王は、

わたくしを旅に出すおつもりがないのよ。

そんなことは、望んでらっしゃらないの」

《望んでおられない？》《そうよ》

《何でそんなことがわかる？》《何で？

父が王様にご返事しなかったから

《それは、他のやり方で

290

295

300

305

310

解釈し、理解することもできるさ
父上は私のお願いを、終りまで
すべて、快く聞いて下さった。

一言も、口をさしはさまずにね。

だから、このお願いを快く思われ

暗黙の裡に、お許しになったのだよ》

《暗黙の裡にだなんて、それは嘘よ

だって、まだわたしたちにはよくわからないもの

——良しと言われたのか、駄目なのか》

そこでテレウスは再び王に尋ねた——

《義父上、賢明なるアテネの王よ、

あなたの娘御プログネからの伝言を

たしかにお聞きになりましたよね。

もしこの世に生れた男たちが全員、

あなたにあることを要求したとして、

あなたは、その男たちの誰よりもさきに

まず、この私に應えて下さるべきでしょう

そして、私の考えでは、次に娘御たちに

少くとも、お応えになるべきだ。

もしこの私には応えて下さらなくても。

なぜなら、娘御の一人はあなたにお願いをし、

もうお一人もこの私に同じことを、

つまりどちらも、あなたに、この私が

330

325

320

315

連れて行つて会わせることを求めているのです。》
パンディオンは、がつくりと両手をつく。
この問題に深く心を悩ませたのである。

しかし、どんなに悩んでも、

返答をしなければならぬ。

《婚殿よ、と王は言う、ご存知のように、

現し世で私が持っている物は、何一つとして、

まったくお望みのままに、

さし上げないものはございませぬ。

もしあなたがどうしても必要と仰有るなら

されど、私にとつて娘がどんな宝物であるか

もしおわかり下さるなら、そんな御要求を

この私になさらないで下さいませぬか。

私にはもう何の希望もありません。

もし娘がいなくなり、一人ぼっちになれば。

今の私には、杖がなければ

この身を支えることもできません。

もしも、お気にさわる事がなかつたら、

御申し出の件につきましては、

先へのばして、いささか時間を下さいまし。》

《先へのばす?》《はい》《よろこんで。

で、どの位?》《私が生きている限り、

と申しますのも、おわかりでしょうが、

355

350

345

340

335

私はもう、さほど長くない生命^{いのち}です、
年を老つて、すっかり弱つております
すでに、ヤコブよりもアブラハムよりも
エサウよりも、長く生き申した

360

その間、とても愉快に過ごしました。

されど、今は何一つ楽しみはありません

私めの安楽のすべては娘です、

ただ娘のただけに生きております、

つまり、他には支えがないのです。

もしあなたに娘を連れて行かれたら、

それだけで私に死ねと仰有るに等しいのです。

このことははっきり申し上げられる

娘が私を守り、仕えてくれるのは

夜も昼も、夕方も朝も。

私が起きるにつけ、寝るにつけ

他の人の手に委ねることはありません。

やさしい娘が私を大事にしてくれることは、

衣服を着せたり、靴を穿かせてくれたり、

すべて至れり尽せり、

もし娘の介護がなかったら

とうの昔に私は死んでいたでしょう。

それゆえ、お願い申す、私を憎んでいないなら
どうか娘を取り上げたりしないで下され。》

380

さてテレウスの心は穏やかでない。¹⁶
気に入らぬことを聞かされ、
自分の目論見^{もくろみ}が失敗に終わったからだ。

自分の立場はじつに不利で

どうすればいいか、どう言えばいいか――

じつに不愉快で、出るのは溜息ばかり。

自分の思いを遂げられぬことに

仏頂面をしているが

その思いとは邪悪で正気のさたでないのだ。

言葉ではどうにもならぬゆえ

物も言わず、ぶつぶつと嘆くばかり

狂気が知恵を打ち負かしたというわけだ。

――狂気？ いや、思うにこれは愛欲だ。

愛の神はすべてを打負かし、破壊する。

そのくせ気が向けば

倒した相手を忽ち再起させる。

――この神は敗者に勝利を

もたらす力もあるというのか？

――その通りだ。そのことは、

愛のことで叫んだり泣いたりする連中が

はからずも証言している。

愛の神に仕え^{つか}、怖れている連中を見て

正しく証明できるのは、

400

395

390

385

およそ誠実さなどというものを

移り気な愛なるものに見出すことなど不可能だ

それは親しい友たちを見棄てては

新らしい兵隊を傭い入れて

その全員に同じ報酬を与えるのだから。

——何と、愛の神は誠実ではないか、

みんなに同じ報酬をくれるのなら？

——さにあらず、明白な不誠実よ、

およそ人はめいめいの価値に従い

その真価の高さに応じて

それだけ多くの報酬を得るべきものだ。

ところが、私の知るところによればどうだ、

愛の神は、最悪の連中を傍に置き、

最も価値あるものを拒んでゐる。

なぜ、最良の者たちが失寵するかおわかりか？

なぜなら愛の神には、

最良と最悪の区別がつかないからだ。

——区別できぬ？ では賢明でないのか？

——賢明であらせられる。ただ、この神は

ご自分に欲しいものがあるときは

賢明さなど全くどうでもよいのだよ

愛の神は、風よりも軽い

それゆえに、嘘つきで、詐欺師

425

420

415

410

405

約束するときは気前がよく、金持ちで

いざ与えるときは吝でしみつたれだ

ひたすらひどい仕打ちを与える。

自分に従順な相手に限って

愛の神が叩いたりいじめたりする相手は

苦心苦労して神に奉仕する人々

どんなに苦しくてもどんなにつらくても

かれらは身を引くことができない

なぜなら真剣な恋に陥ちた者は、

どんな報酬を受けようと

決してあきらめず、決して倦むことを知らない

なぜなら、いくら愛しても尽しても足りることがないから

愛は、望むことすべてをやつてのけ、

嘆き悲しみに浸れば浸るほど愛の炎はもえる

愛欲という病いは、葉を

与えればいよいよ重くなる

どうすれば癒えるのか誰にもわからない

欲望を何とかするために

欲望からの解放を求める、と

却つてそれはいよいよ緊く身を縛る。

だから、もしテレウスがもっと賢ければ

この件からさつぱり手を引いて

乙女を連れずに帰ればよかつたのだ

450

445

440

435

430

しかし、乙女がかくも優雅で美しく
あらゆる美と美点を備えているのを見ては、

もしこの暮る思いがかなわぬときは
生きたまま気が狂ってしまうだろう、
とうてい諦められるはずがない。

ではどうするか？ どうすればいいかわからない。
乙女を何度も腕に抱いては、

深々と溜息をつき、涙を流す。

いつになったら、この乙女を
わがものにするのか、わからない。

こうしてテレウスは悪魔にとり憑かれたのだった
まったく悪魔は休む暇もなく悪を企むもの。

ついに自ら考え、考え出したのは
力づくで手に入れる他はない

もし愛によって乙女を勝ち得られないのなら
あるいは夜陰に乗じて拐さらってしまうかだ。

しかし今は、さしたる手勢も率いていない
とすれば、強行策は必ずしも

よい結果をもたらさないのではないか
だから、できるだけ猫をかぶる、

さもないと愚かしくみじめな騒ぎになりかねぬ、
もし折角眠っている町が起きてしまえば——

そうなる自分たちは生きて帰れまい、

475

470

465

460

455

こんな考えをもたらしたのは、
どこからか訪れた理性のおかげだ
こうしてテレウスは強行策を回避した。

こんな折にいったいどうして、
理性が働いたのか、不思議に思われる

テレウスは余りにも常軌を外れていたから

——常軌を外れて？ 何のために？——愛欲のあまり。

こんなものを誰も愛と呼んではならぬ

——愛ではない？——そうだ——では何？

——逸脱、不実、狂乱

なぜなら、もし私の考えが正しいなら

狂愛はすでに愛にあらず、

テレウスの恋狂いは度を越えて

さらにきりもなく度を越えていった

だから私は大変に驚いたのだ、

いかなる理由がかれを翻意させたのか、と

——理由？ どういうことだ？——つまり彼は

いったん考えた狂気の沙汰を引っこめて

もう一度やり直してみよう、

懇願することで説得できるかどうか、と。

そこで再度、王に向かつて、

こんなふうにも、懇願したものだ——

《義父上、私の申出をお断りになっても

495

490

485

480

私に対する大した仕打ちでないとはわかっております。

ここへ参りまして時を無駄にしても

それは全然何でもない、と。

私は、大変に後悔しておりますが、後の祭り^{むす}りで、
すぐすごと来た道に戻るばかり。

とにかく生れてこのかた、こんなつまらぬことで
何一つ得ることがなかったのは初めてだ

こんなことなら、今日、父上に会いに

海をこえてはるばると参上などしなかつたものを。

世話をしてくれる娘御のことなどと

つまらぬ言い訳を考え出されたことよ！

このまま私が途方に暮れてしまったら、

何とまあ、大いなる無駄な努力をしたものだ

ご自分の世話をしてくれる召使いにも

腰元たちにも、不足するですって？

そういう御不自由のことならば、

僅か三、四日、がまんなさればよいこと。

その間に、娘御には、私をよこした姉上と

楽しい時を過ごさせてあげて下さいまし。

こんなささやかな目的で私は長旅をして、

それが無駄だったでは、あんまりですよ。

娘御にとつても、私の苦勞に対して、

そして他にも、私を苦しめることがあるのです。

520

515

510

505

500

プログネは私に、どこへでも行け、

二度と戻って来るでない、

すっかり愛想が尽きるから——もし

妹を連れずに帰って来たりしたら、と。

そうなったら私はどうすればいいでしょう、

そうやって追放の身になったら、

息子にも会えなくなる、

息子にも、妻にも。

なぜなら二度と帰れないと思うからです、

ごらんのように、私が泣いているのは

心配でたまらないからです、

義父上^{ちち}がこんなことで私を不幸な身になさるのかと。

お願いです、どうか娘御を私にお預け下さい

必らず、二週間後には

無事、あなたの許^{もと}にお返ししますから。

このことを、お誓いします、

私の信仰と、

私の信じるすべての神々にかけて。

この誓約と私の信仰とに免じて

どうぞ娘御を私にお預け下さい」

ああ！ 卑劣な男、何たる嘘付き！

王を裏切り、こんなふうにあざむくとは！

それなのにパンディオンは、この涙を見て

540

535

530

525

相手が嘘をついているとはつゆ思わない。

こんなにあられもなく泣くのは

本当に嘆き悲しんでいるにちがいない、と。

この卑劣な暴君は、こうして、

約束したり、誓ったり、

哀願したり、泣き落したあげく

とうとう、望みの結果を得たのだった。

パンデイオン自身が、がまんできずに

もらい泣きしてしまったものだ。

二人はそろって泣いて泣いて

どっちの方がたくさん泣いたかわからない。

ひとは、年を老るほどに

涙もろくなるというのは本当だ

《婚殿、と王は言う、それほどまでに

約束され、誓約され、

確かなしるしを示された上は、

どうぞ明日、娘をお連れなさいまし。

娘を、貴方のお手にお渡し申そう。

ただし私の辛い気持をおわかりあれ。

娘の身をしっかりとお護りいただき、

できるだけ早く、連れ帰られよ。

わが娘がこの手に戻るときまで、

わが眼の涙はかわくことなく

545

わが心に喜びの戻ることはありませぬ。

もし私との友情を大事にお思いなら

どうぞ早くここへお戻りあつて、

娘を連れ帰るよう御配慮下さいまし。

このお願いをおき届け下さるには

いろいろと御面倒もおありでしょうが、

どうぞこのことをお忘れなく。》

《忘れは致しませぬ、とテレウスは言う、

義父上、これ以上、申されるな、

なぜなら貴方以上に、私は

早くここへ戻つて、娘御をお返ししたいと

気がせているのですから。》

こうして談合は終りとなり、

テレウスはこれ以上何も求めず、

パンデイオン王は、命を下して

とり急ぎ食卓をととのえさせる。

執事騎士も、司令官も、

パステイ配給係も飲物を注ぐ係も

みなめいめいに、気を配り熱心に

準備をしたり、手配をしたり、

自分の仕事や役割に心を砕く。

ある者はかけまわつてテーブルをしつらえ

ある者は、いくつもの場所に

545

122

550

このお願いをおき届け下さるには

555

気がせているのですから。》

560

とり急ぎ食卓をととのえさせる。

565

自分の仕事や役割に心を砕く。

590

ある者は、いくつもの場所に

585

みなめいめいに、気を配り熱心に

580

テレウスはこれ以上何も求めず、

575

義父上、これ以上、申されるな、

570

このお願いをおき届け下さるには

水を準備するのにいそがしい
暇な召使いなど一人もいないし
侍臣も、気のきく小姓たちも

のこらずあれこれの仕事を受持つている
みな、よい給仕をしようと心を砕いている
心たのしむことがない

ところがテレウスは、どんなもてなしにも
すぐ隣の食卓に就いている乙女の
美しい姿態と顔を

ただうっとり眺めること
それだけが王の飲物であり食べものなのだ
たえず乙女の傍でそわそわして

しきりに乙女の気を引き、世話をやこうとする
そのわけを知るのは王自身だけ
手を引くつもりは全くないのだ

とにかく自分の大いなる非道の実行から
機会さえあれば——しかしそれは仲々訪れない
ただ眼を瞞みぼつて乙女を眺め

他のことは何一つ考えられない。
一同は長い時間、食卓についていて
王はたのしくて仕方がない

それは飲んだり食べたりすることよりも
乙女を眺めることの嬉しさのせいだ。

610

605

600

595

食卓には、この間、惜しげもなく
孔雀や白鳥や雉キジの肉や、
澄明で美味な葡萄酒が

気前よく、たつぷりと、
ふんだんに提供されたことは
王宮の食卓に恥じない豊かさだった。

諸侯は、食事が終ると、
みんな立ち上がり、召使たちは
銀の器に水をみだし、

諸侯は手を洗って、拭った
手を洗い終ると、みんなそろって
クッションに背をもたせ、

めいめいの感想を語り合った。
良い事や悪い事、愚かしい事やまともなことを。
小姓たちは、手ばやく

寝床をつくり、しつらえる。
そんなことは楽しくも嬉しくもないのだ、
しかし裏切り者の卑劣な暴君には——

眠る気などさらさらない。
一晩中、眼をさましていたくらいだ、
親しく語り合うことができるなら、

もしかして、あの心惹かれる娘と
——何だつて？ 乙女は何も知らずにいた？

635

630

625

620

615

——そうとも、もし乙女が

この男の心中を見抜き、屈辱を
もたらすと知っていたならば、

男と一緒にいこうとは決してせなんだものを。

一同があれこれと語り合ううちに、

寢床の準備はととのつて、

諸侯はみんな床に就く、

一方テレウスはこの夜、

ベッドで身も心も休まることなく

眠るために目を閉じさえしなかつた

こうして夜通し、

まるでベッドの寸法を測るみたいに

身体を縦にしたり横にしたり、

なぜこんなに夜明けが遅いのかと

たえずうらみごとをつぶやいた。

一晩中、輾転反側して

起きてみたり、また寝てみたり。

一方、就寝した人たちは

心安らかにぐっすりと眠って、

テレウスの愚痴などつゆ知らずにいた。

そのテレウスは夜ぢゅう眠らず

狂おしい思いにさいなまれ

ついに塔の夜番が¹⁸⁾

655

650

645

640

日の出の角笛を吹き鳴らした。

テレウスは角笛で朝を知ると、

黄金三拾マルクもらつた場合にも

かほどとは思えぬ程のよろこび様をした。

随行の臣たちの目をさまさせ、

直ちにみんな起き出して

その命により、一行は

驚くべき手早さで準備をととのえた。

一方、王はかれらが目をさまして

急いで起き出したことを聞いた。

たとえどんなことがあろうとも

約束は遂行せねばならぬ。

そこで自分の約束を守って

娘をテレウスの手になたす

乙女はすっかり満足し、うれしくて

とてもとても幸福¹⁹⁾だった

しかし、よくあることだが、倅²⁰⁾せは

不運のはじまりである。

たのしく出かけて、帰ってくる

こんな確かなことはないと思つてた

どうしてこんなことが起こりえよう？

どうしてこんなひどいことを

あの暴君が準備していようとは!!

680

675

670

665

660

誰にもこんなことは考えられなかった！

テレウスは乙女を港へ連れて行き

パンディオンは二人に随いて行きながら

その道すがら、婿殿に、

そなたが約束してくれた通り、

その日限には必ず帰らせてと懇願する。

《そしてお前、わが可愛い娘よ、

すぐ帰ることを考えておくれ

この父のことを忘れるでないぞ

なぜなら、お前の姿を見れば嬉しく

たのしく、しあわせなのだから！

わが可愛い娘よ、早く帰ってこいよ、

早く帰っておくれ、もし早く帰ってくれれば

私の喜びと幸せも早くやつてくる！》

この言葉を、千回もくりかえし

千回も接吻しては抱き締め、

千回以上もこつちを振り向かせた。

娘が船に乗り込もうとするたびに、

そうやつてできるかぎり引き止めて、

いよいよ行かせなければならなくなると、

裏切り者に、娘を委ねてよろしくと頼んだ。

こうして王は、狼を羊番にした

羊番になった、文字通り、

705

700

695

690

685

——もしあいつが心を入れかえて

狂暴な企てを悔むことさえあつたなら——

しかしあいつにそんな気は毛頭ない。

それどころか、早く早くと気が急ぐ有様だ。

別れ際にパンディオンは泣きながら

心をこめて、この不実者、

裏切りと悪事を企む者に接吻する。

テレウスは裏切りの策を練り、誰が苦しもうと、

思い通りにやつてのけるだろう、

それだけの腕力と、権力があるのだから。

もう直きに、彼の連れの乙女は

非運の底に突き落される！

帆は一杯に風をはらみ、

船はどどん突走る。

風は思い通りの順風だ。

みるみる遠去かる港では

パンディオオンが、はげしく泣きむせんでいる、

去り行く愛娘を思つてだ。

こんなに泣くのも、無理もない

なぜなら二度と娘は帰り来ず、

二度と相見ることはないのだから。

しかしそんなことはつゆ思わない。

725

720

715

710

ただ、フィロメーナはすでに、
 危険な崖、悲運の瀬戸際にいた
 つまり、乙女はただひとり、
 荒れ果てたテレウスの持ち家へ
 邪念に駆られた男に導かれて行った。
 その家はとある林の中にあり、
 (とクレティアン・ル・ゴワ⁽¹⁾は語る)
 およそ四方を見ても町からは遠く、
 村里や畑地からも遠く離れ、
 近くには街道も小径さえもない。

730

訳注

〔凡例〕

一、各項冒頭に、訳注通し番号、次に物語本文の行番号、そして項目、注記の順。

二、略記として次のものを用いる。

オ変——オウイディウス「変身物語」

オ教——「オウイディウス教訓集」

ド・プール——C. de Boer (éd.) *Philonena*, conte raconté d'après

Ovide. Paris 1907 [Slakine Reprints 1974]

AB——Anne Berthelot (éd.) *Philonena* in *Œuvres complètes de*

Chretien de Troyes. (Bibliothèque de la Pléiade)

EB——Emmanuèle Baumgartner (éd.) *Philonena* in *Pyrame et*

Thisbé. Narcisse. *Philonena*. (Folio classique)

〔以下次号〕

735

(1) 4 フィロメーナ——*Philonena* オ変では *Philoneda*
 (ピロメラ)だが、フランスで成立したオ変の写本の中には
*Philonena*となっているものもあったので、クレティアン
 はそれに拠ったと考えられている。

(2) 16 ヒメネウス——*Hymeneus* 結婚を司る神。オ変で
 は、立ち合うべかりし神として他にユノ女神、優雅^{グレース}三女神
 [現代日本にこれから取ったスリー・グレイセスというコー
 ラスグループがあった]の名を挙げているが、クレティア
 ンはこのうちヒュ^シメナイオスだけを挙げ、式で祝歌を歌
 うべかりし役に「学僧」「司祭」という、キリスト教的慣
 習を追加しているのは、故意のアナクロニスム、ギリシャ

- 神話とキリスト教的モチーフとの混淆であり、これも中世テクストでよく用いられた意図的手法（A・Bによる）
- (3) 21 ワシミミツク——*Il d'us* 才変では不吉な鳥としてこの *bubo* だけを挙げていて、以下のモリフクロウ、カッコウ、メンフクロウ、カラスは、クレティアンによる追加のように、〈不吉な鳥〉の名を次々に動員してテクストをふくらませるのは、クレティアンの方法の一例
- (4) 30 アトロポスにテジフォース——*Atropos et Thisiphone* アトロポスはローマ神話で生死・運命を司るバルク (*Parques*; ギリシャでは *Moiré, Moires*) 三女神の一。A・Bは次のフリアイ三女神中のアレクトロとの混同かとしている。ティジフォースは、ローマ神話で復讐の三女神フリアイ (*Furies*; ギリシャ神話では *Erinyes*) の一。
- (5) 40 テルヴァガン——*Tervagan (t)* 中世ヨーロッパでは、サラセン (イスラム) の三主神の一と考えられていて、たとえば『ロランの歌』四〇〇二行中に七カ所、マオメ (マホメット) および／あるいはアポリンと並べて言及されている。
- (6) 83 このために最悪の事が——物語の先取り。カタストロフを予告して読者に緊張感をもたらす (A・B注)
- (7) 125 髪の毛の乱れたままフィロメーナが——*Phimena dechevelée* いよいよヒロインの登場。以下206行まで、九十行近くを費してのプロフィル (ポルトレ) は、クレティアンの精筆の典型例。(才変では、その美しさを水の精や森の精にたとえた第45行前後のわずかに数行のみである。) また、容貌や姿態のみならず、174行以下では、教養や趣味や技芸の豊かさ、巧みさにまで及ぶ。
- (8) 146 黄風信子石——*Jaconce*。現代語「ヒヤシンス *hyacinth*」も、植物名と鉱石名の両義がある。ジルコンの一種。
- (9) 147 目と目の間は広く——*Large entreuil* 十五世紀の詩人ヴィヨンの『遺言詩集』第52詩篇にも美女の特徴として《*Grant entreuil* 目と目の間は広く》とあり (ヴィヨン詩の材源の一つ) 『薔薇物語』にも) A・ランリのヴィヨン詩現代語訳注に《この目と目の間 *entreuil* という単語は、今やこの美貌のアスペクトとともに、失われてしまった》と記している (拙訳『ヴィヨン詩集成』二八七頁。及び篠田勝英訳『薔薇物語』ちくま文庫「上」三七頁を参照)
- (10) 175 アポロニウス——*Apollonés*。中世フランス、さらにヨーロッパ各地で十五、十六世紀にも広く読まれた愛と冒険の物語の主人公、アポロニウス・ド・ティール *Apollonius de Tyr*。遡れば五、六世紀頃にラテン語で書かれた作品からの仏訳が十二世紀に出て大流行した。トリスタン物語との共通性が多く指摘されている。
- (11) 175 トリスタン——*Tristan*。ケルト起源の悲恋物語の主人公として有名だが、作中では竖琴を弾き、歌物語を作り、チェスに興じ、武勇にも優れていた。なお、アポロニウスもトリスタンも男性の英雄なのに、女性であるフィロメーナの教養・才智がこの二人より優れているとされている点をA・Bは特に注目している。
- (12) 188 すぐれた織姫——*si bonne orfèvre* ここで特に織姫としての技芸を強調しているのはもちろん後段の伏線。才変ではその直前に初めてヒロインがこれを学ぶことになっているのを、クレティアンはすでに彼女が身につけた技であ

るとしている。また、織りながら物語の場面を図柄に現出させていく技法について、才変ではこれに先立ち、巻六冒頭の「ミネルヴァとアラクネの技くらべ」の中心主題となっていて、ピロネラの技法は、後段でのその一変、奏となっている。

- (13) 192 エルカンの軍勢——*mesnie Hellequin* 十一世紀末
十二世紀初期のオルデリック・ヴィタリス *Oderic Vitalis* によるテクスト、その他で知られる、いわゆる《荒獵師伝承》。多くは「殺戮に明けくれた暴君が、死後、永遠に空中を幻の獲物を追ってかけぬぐる話」(篠田知和基) 詳しくは一九九八年名古屋大学での比較神話学シンポジウム「荒獵師伝承の東西」の報告書および最近出たばかりの Karin Uetschi-La *Mesnie Hellequin en conte et en rime*, Champion, 2008 を参照。クレティアンはこのヴィタリスのテクストに拠ったものか。
- (14) 238 愛の神の挑戦を受けた——*Amours a vers lui prise guerre*。クレティアン作とされる抒情詩の一篇に次のような八行詩がある——

愛の神は、愛の戦士に対して
Amours rengons et bataille
争いと戦いを挑んだ
Vers son champion a prise
戦士は愛のために大いに苦闘して

Qui por li tant se travaille
あらゆる努力を傾け

Qui a desrainier sa franchise
おのれの自由を護ろうとした

A tote s'encontre mise

この戦士に神の情が与えられなければ不当だ

Nest drois qu'a sa merci faille

しかし愛の神は、これを評価しつ

Mais de tant ne lo prise

力を藉してやろうとまではしない

Que de s'aie li chaille

(*Œuvres complètes*, Bibl. de la Pléiade, p.1040)

- (15) 243 《可愛い人よ——*Ma douce amie*…… 以下319行まで
頁) ABは右の詩篇に注目して、これを『フィロメーナ』がクレティアン作品であることの根拠に挙げている。(一三九八

の、テレウスの口説きとフィロメーナの応酬の長い対話は、才変では間接語法を主とした簡潔な数行の記述で済ませている。320行～380行の、テレウスとパンディオンの間の六十行に及ぶ長い対話も、才変ではわずか数行の記述にすぎない。

- (16) 381 さてテレウスの心は穏やかでない——*Or, nest pas Tercis a aise* 以下の、テレウスが説得の失敗に悶々とする心理をめぐって、愛の神がなさる仕業を批判する語り手の自問自答を含むくだりは、才変にはない。そのあと497～541行の、テレウスが気をとり直して再び義父に懇願し、偽りの

誓言を並べてついに許諾を得る長広舌も、才変になく、クレティアンの創作。

(17) 580 こうして談合は終り——*Aant la parole est finie* ……

つまり遂に王がテレウスにフィロメーナを託すことが決まったあと、別れの宴が催される、その次第が584行からはじまるが、その間テレウスが情慾と次の悪企みに耽つて不眠のうちに輾転反側するさまは、才変でも四行で叙述されるところを、クレティアンは597、658行すなわち六十行も使つて延々と語つて、翌日からの旅の先にある暴虐シーンを読者に予告する（ここには、読者に対する配慮のみならず、原典への批判さえ感じられる）。

(18) 659 夜番——*la guete*。夜番というより朝告げ係ともいう

べき《夜警》の役柄は、中世の南仏やドイツの抒情詩人たちのアルバやターゲリート《後朝の歌》というジャンルに殆ど不可欠の重要な登場人物。夜通し愛の行為に耽つている奥方と詩人に、夜明けの到来を警告する。ただし夜明けは、恋人たちに悲しみを、テレウスには喜びをもたらした。

(19) 734 クレティアン・リ・ゴワ——*Cresien li gois* この物語の作者名、すなわちクレティアン・ド・トロワのことと考えられている（解題参照）が、ゴワについては、トロワと同じシャンパーニュ地方に《*Gouais* グエ》という村があり、そこが作者の出身地かとも言われている。（十二世紀頃の発音では、*gois* は「グエ」、*Troyes* は「*trwe* トウルウエ」に近かった）